に剣き玉はざりしぞ余輩の身に取りては孰れも其恥辱なるに格別の差異となし固より余輩は最早一箇人の身分にて侯へば是非共に此の徽號を要すると云ふにもわらず又敢て那翁家の再興を企つると申す譯にてもなく唯眞實を申せば此の徽號は余輩の身に取りて誠に慕はしき一物なれば此の徽號こそは余輩が往時の戰場に數度の大勝利を目撃し又其の全盛の時めく頃には余輩此の徽號を帶びて傍若無人に歐洲大陸の各都府を横行せしこともあり又昨日まで佛國人が宇内に冠たる最榮譽の地位を占めたる時にも此の徽號を帶びたることなれば今斯く海外萬里流人の身となり果てゝは尚は更に此の徽號こそ慕はしく存ずる儀にこあれ然ればあり左樣の由來ある徽號なればこそ今の政府も嚴に此の徽號を帽子に附くるを禁制し其れが爲めに止むを得ず之を脫したる者共も多けれども嗚呼此の徽號の三色も永く未世に至るまで佛國人の心肝に銘じて之を忘るゝことは侯ま

じと述べければ流石に彼の士官も何の答さへなかりけり

又或時前の士官が余に向ひ扨て此の世の行末は如何に成り行くことやらん其も預しめ計られざることにはあれど是れまで帝を始め卿等に御困難を蒙らせしことは誠に相濟まざる次第なれども又其御無禮を償ひまゐらす時節到來致さぬとも申し難し假令へば又ウヰリントン將軍が或も帝始め卿等を再び巴里に護送せらるゝの事もこれあるべく若し左樣の事ありたらんには定めて卿等も御喜悦なるべしと云ふに余も之に答へて仰の儀も誠に御尤の次第にて若し果して左樣の事あらば一同驚愕仕らん然りながら拙者一人も決して其儀に御承諾申すまじとかねてより覺悟致したり事宜によりては帝をも見捨て奉るとも苦しからずと覺悟致し候へ共帝には左樣の御擧動ありて拙者を困しめ玉ふ樣の儀は之をあるじと思考すれば拙者は安心なし居れり殊に拙者が斯く健氣に覺悟を極めしも畢竟も帝が朝夕の御蔗

陶によりてのことにて凡べて拙者が自ら童心の誤りと名づけし身の過失を矯むることを得たるは皆帝が御教訓の賜にて候なりとたしなめたり

又帝は果して現今の王家に向ふて爆烈彈を投じ或は刺客を使ひ或は刺客を養成し或は金を出して弑逆を行ふ者を募り志等の事ありしが決して之れなきなり啻に之れなくの命のみならず反つて彼の王族等と革然れど流石に帝が御在位の時には此等の人々が法庭に引き出さるゝことわりしも敢て一人の我れこそは帝に仇せしとは公言せる者さへなかりしが今や世の中の移りかはりて舊王統に復するを見るや皆な我も〳〵と名乘り出で我れこそは前の那帝に害を加へし者なれとて卑劣にも其の恩賞の沙汰に與らんことを望めり然るに王も王にて古の路易第十二世の金言をゞ顧みず彼のリール侯の邪計を用ひて之を

實行せし者を賞しつゝ厚顔にも自ら王位に上ることゝはありぬ唯帝が至尊の位を踐まれしと全く前に遜るが如き卑劣の陰謀により之を踐み玉ひものならず誠に青天白日に公明正大ある順序を逐ふて其位には昇り玉ひし御事ぞかし而して其の御行蹟たる實に千古未曾有の御事にして抑も帝の如き御出世は之を昔しの歷史に比するも誰かは自ら參事院に臨御ありて左の如く勅諚ありき

「朕と固より敢て帝王の冕冠を掠奪したる者ならず朕は實に其冕冠の溝中に委棄せられしを拾ひ取り而して後に人民が之を朕の頭上に加へたるなり故に此の帝冠の命令する所は凡そ佛國人民たる者擧て服從せざる可らざるの道理なり」と

實に然り帝と佛國と並立するの位地を得せしめたると共に又國民を塗炭の中に救ひて吾人の誤謬に正し玉ひ凡そ佛國の舊弊とも稱すべき者は皆帝の御方によりて全く之を掃蕩し尽くされ唯善美の事物

のみを吾人に與へ玉へりけり此の儀に付て帝の曾て仰せありしは朕ば最初より一点の汚行なく公明にして且つ潔白なる身をもて王位を踐みし者なるぞ」と嗚呼從前の佛國帝王たりし者誰か能く果して此等の言語を公然と吐露し得べきや

又古來歴史中に於て就れの時代に比するも未だ曾て帝の御代の如く其恩徳の普及なしつゝ且つは信賞必罰にして其の國庫に濫費なく並に學術技藝の事を勸奬し玉ひし時ありとも實に此時より盛んに光榮が世界に輝きしも實に此時より盛なりしことはなかりしあり當時帝が參事院に臨御し玉ひて議員に勅諚ありし御言に「朕が畢生の希望する所は他あらず唯佛人の光華を世界に發揚せしめ世人をして皆な悉く佛人を欽慕するに至らしめ併せて佛人をして就れの地に行くも我が郷土と同樣なる自由を得せしむるにあり

尤も現に帝が御在位の時といへども或ひ人民の自由を伸るを得ず或

は又政府の權限を越へたる所置なきにもあらざれば此は之れ時勢の萬已むを得ざるに出でたる次第なり今や余輩が斯く不幸の身となりしにつけても斯る既往の事共の折にふれて思ひ出さるゝ事なるが實に帝が國家の爲めに朝夕宸襟を惱ませられ又は其天錫の御勇武にわたらせ玉れつるは世にも贊美し奉るべき御事にして殊に其の大難に臨ませられて千挫百折毫も屈し玉はざりし御偉蹟こそ帝が位を避け玉ひし以來ます〳〵世上に發表し來り又今日斯くまでに御末路に沈み玉ひしによりていやます〳〵に御鴻名の轟き渡りて果しなきに至らんとて固より疑ふべくもあらず

○九月十九日より　埃及遠征の事

○十月十四日に至る

却て說く帝の嘗て御物語ありしに由れバ埃及遠征に出發したる軍隊は皆伊太利征討軍の者共なりしが此役には前日には似もせで甚た劣りたる擧動もわらはしけり其と如何にと云ふに兵士等は皆遙かに本

國を離れて海外の異境に遠征したることなれば鬼より猛き軍人も流石に悲しみて故郷を想ふの情のやる方なく或は落膽し或は不平を鳴らして止まざりし其の有様はなか〳〵筆紙に盡くすべくもあらぬ程なりけり或る隊中より二人の兵士が物狂はしく驅け出せしが此は餘り思ひに堪えかねつゝ斯る憂き目を見んよりは寧ろ身を投げて死に果んとてナイル河に向ふて走り行く体を現に帝の御目撃ありし事もあり又ベルトラン氏は當時軍中に在りて其頃有名なる將校ラアンヌ幷にシューラー等の人々とても同しく思ひ沈みつゝ果て失望のあまりに兵士の見る前とも憚らで官帽をばて足にて蹈み破りあどして其の不平の氣を洩せしを目撃したりと余に語られしが其折り帝に乞余に向ひて此等の不平の原因を御説明あさるゝ様當時の將士共は皆巳に歐洲に於て軍功により立身なし多少の位階財産をも有せる者なれば彼の埃及の如き未開不毛の地方に出陣して雨露に暴露するの艱苦

を蒙らんは實に堪え難き情實もなりしことゝ思はる然れば當時彼等が若し余が指揮の下に在らずして他の大將に屬せしことならば不平憤懣の餘り大なる罪惡を犯すに至らんも知る可らざりしあり」と

又當時兵士中にて不平の者共が互に黨を結びて軍旗を奪ひ取り之を亞歷散得に持ち去らんとせし事あり其他にも右樣の企てゝ屢ば起りしと云ふ然れど幸にして當時ゝ最早帝の御威光は神の如く且つ大功業あらせられし御方を頭上に戴き居りしにより大事に及ばずして止みしとぞ或日營中にて餘りに露々と將士等の不平を鳴らして穩かならねば帝にも之を聞きかね玉ひて其の將士中の尤も丈高く逞くましげなる者の方に向ひてツト進み入り玉ひ其者に打ち向ゝれ足下等ゝ何か私しに密議を企つると覺えたり若し此末に戒心せぬ時ゝ己むを得ず拙者は身に帶びたる職權に由り處分致す可し今見る所足下の体格骨は拘いと逞ましくいかめしげあるか拙者の職權を以てするなら

ば乾度二時間の役に足下を銃殺に所することゝいと易きぞ」と嚴しくたしめ玉へり

終は申せども又戰場に臨みては士官幷に兵卒に至るまで其の働きの勇しきこと天晴れ伊太利征討の時に劣らず打ち續きて感ずべき程の働を見せにける又當時帝に從ひまいらせし將校中にて帝にもゆく〳〵は賴みにもなるべく御思召さる屈指の人々さへ此役には兎角に思鄕の念にはだされてか〳〵しく戰はんともせで帝も之を駕御し玉ふに非常の御困難なりしと云ふ且つ說く此の人々等こと皆日頃の勇氣も失せ果てぬる有樣にて夜となりては遙かに故國の空に入る月のみ打ち眺められ最愛の妻や子が如何に待ちわび居るやらんと打ちかこつては憐れと云ふも愚かにて就中最も打ちしほれたるは現に帝の參謀長を奉職せる人とこそ聞えける抑も此人は其後本國に歸りて後も帝の御覺えいとめでたく帝と共に屢〻各所の戰場を踏みて爲めに帝よ

り「戰場の友」と云へる寵をさへ賜はりし程なれど此人こと天性溫厚にして果斷に乏しかりけるとぞ今其一例を擧ぐれば當時帝が巳に埃及遠征の御出陣にて將さに土耆港より船出し玉はんとせし折柄此人も御跡を追ひて巴里より馳せまいり帝に謁見申しけるが「此度こと拙者參謀長の重任をも辱ふしたる儀に候へば是非に御供仕る可き筈には候へども目下病氣に罹り迚ても御伴こと出來きかぬる云々と申立て其場より身を免れんとせし事ありしも帝にこと其の一旦巴里を出立して此地までまいりしことゆゑ更に其の請をば聽き入れ玉とざりしかば此人も今は詮方なく御伴申しけり斯くて此人こと埃及に來りし後とても長の寢ざめにいとゝなは妻子のことのみ胸に迫りて今は早や抑ゆべくもあらざれば遂に帝に請ひ奉りて一先づ歸國の御許るしを得たりけれ〻此人は帝に御暇を告げ急ぎ歸國の途に上りしが日ならずして又歸り來り悔悟の淚にくれつゝも帝に言上申す樣「最早拙者も歸國の念こ

一つに思ひ切りてこそ候へよく物の道理を考へ候に我一人おめ〳〵と妻子の愛情にひかされて歸國するが如きもまことに男兒の恥辱の限り且つ又身不肖には候へとも一旦御供申せし上は此末縱令ひ如何におりゆき申すとも君と生死存亡を共にせん覺悟をば心に誓ひて斯く再び歸り來りて候とのことなりし

扨て又兵卒中にも故郷の事のみ朝夕に思ひつゝけて兎や角と不平を訴ふる者の少からざりしが彼の兵卒等は常に軍中あからさまに互に諧謔に日を暮しつゝ笑ひ興じて其の爲めに頗る長陣の鬱屈を洩らしけり元來佛人の癖として平生最も諧謔を好むが故に斯る場合には大に心を慰むる助けを得たりとなん當時軍中にカフアルソーと云へる將軍ありけるが兵卒等は皆思へる樣今度の遠征の主唱者たる一人は此の將軍なるべしとて一同に之を惡しさまに罵り常に怨を此の將軍に抱きけるが此人は嘗て本國「ラン」河の役に片足を失ひ當時は生れもつ

かぬ跛躄の身となりし人にてありけるが此の將軍が兵卒等の打ち語へる近傍を通行することあれバ一同わざと高聲にて「彼の人こそ我が佛軍が敗北するとも安心して居らるゝならん如何にとなれば己に其の片足は故國に殘り在るものを」とて戲れ笑ひける

此役に帝の御注意にて多くの學士をば學術研究の爲めにつれまいられしが此の學士等も常に兵卒等の惡口にかゝることを免れざりし抑も埃及の地方にて駱駝多くして兵卒等も常に之を飼ひ置き運輸の用に供せしが兵卒等之戲れに此の駱駝を呼びて「半學士」となん稱しけるとぞ（但し佛國にては駱駝の原語「ラーマ」と常に愚人を稱するの語なれば今之を假用して學士の迂愚なるを嘲弄したるものなり）

又帝が始め遠征軍を卒ひて將さに佛國を御出陣あらんとするに臨み軍中に告諭を下し玉ふ樣是れより汝衆軍を導きて彼の富饒の國土に至り以て汝等の身を富ましめ人毎に七アルパン（田尺の稱）地主たるを

得せしむべしと期くて埃及に着陣したる後に彼の世に隠れなき荘々漫々際涯もなく蒼天に接したる阿弗利加の大沙漠を望みて兵卒等は互に顔見合せつゝ驚きにの告諭ありしことなど思ひ出で戯れ評しけるとき「此國も斯くまで廣漠なるに我が將軍は僅々我等に七「アルパン」を限りて取らすると申されしも餘りに少き様ならずや夫れより尚はも多分に與へ賜はるとても我々はなど妄りに之を失ふことのあるべきとて戯れしもいとかしこ

當時佛軍がシリーに攻入りし頃にも兵卒も誰一人左に記るせるザイール氏の詩を知らざる者とてもおく此の詩は軍中一般に流行りて歌ひはやしたり

佛蘭人も今は早や馴れぬ氣候に倦み果てぬ、まして暑さのアラビヤの沙漠の鬼と朽んとて、黄金花咲く故里を、いかでや餘所に見捨つべき、

當時帝が埃及に御滯陣ありし節或日海岸を巡覧あらせられし折りしも潮水全く退きて海面も全く干潟とありてありければ帝にも興に乗じ玉ひて徒歩し玉ひつゝ紅海即ちスエス灣を渡りて對岸なる阿剌比亞に達し玉へり然るに御歸りは夜に入りて途に迷ひ玉ひしより潮も次第に滿ち來りしにぞ帝には危くも彼の昔のファラオンの轍を蹈みつゝ辛ふじて上陸あし玉ひぬ此の事に付きて帝の嘗つて仰せある様若し我れ當時海中に溺死せしならば例の佛國の僧侶共は我を責むる好きロ實として云ひはやすことなるべし」と

帝が亞剌比亞海岸に着し玉ひし時西奈山の寺院惣代として僧の來謁する者ありて帝に向ひて當山の保護人となり玉へかしと懇願に及びつゝ且つ當山に傳來せる人名簿を持參あしつゝ帝の御記名をも請ひまいらせしかは帝にも之を承諾ありて之に記名あし玉ひぬ然れば是れよりは帝の御名も古の高名なるアリーサラタンイブテン等の記名の次に列し玉ひしとなり

又帝の御物語に此の年の事なりしが羅馬法皇よりも書翰を帝の御許に送られ帝を稱して我が親愛なる子息と云ひ又ヌックの「マホメー」教の僧正より書翰を得玉ひしも此年の事にて其の書翰には帝を稱して
サントカバー(回教の本山たる地なり)の保護人と記るしありしとなん扨て斯く歐亞両大洲の宗教權を握れる人より同時に書翰を得玉ひし御事は帝に於ても亦之を古來未曾有の奇談と申し奉るべし然れども之を彼の惡軍萬里埃及より進んで亞剌比亞にまで攻入り玉ひし一大偉蹟にくらべ見ればまことに一小事に過ぎざるぞかし抑も此の一大偉蹟を世に顯はせし英雄中の雄雄と果して誰の御事なりや或時は北方氷雪の中に其馬蹄を蹈かして深入し或時は又南方炎熱堪き難き沙漠に奮闘せし那帝其人の御事にぞある其の戰場の御危難を擧ぐれば北方にては莫斯古の炎々たる兵火の中をば辛ふじて御身を脫し玉ひ南方亞剌比亞の熱地に御命を賭ものにし玉ひ既に激浪の爲めに身を危く

し前後に南北より其の御武畧を試みられ彼の英國の金庫と聞えし印度を震動せし玉ひたるは實に那翁其人の御事にぞある
却て說く埃及遠征軍の頃にと帝も始終兵卒と其の艱苦を共にし玉ひけり當時軍中の萬事に不自由なりしこと甚しく時としては瑣少の入用物にても將卒の等級を願るに暇なく皆我れ勝ちに之を爭ひ奪ふ程の勢なり然れば或日の事なりしが沙漠中を行軍したる途上にていと汚穢なる水溜りを見出せしかども兵卒等は互に讓合ひたる後やう〳〵帝御一人のみに御手を洗ふせまねらせし程なりしと或又日ベリウジコの酋趾を過ぎりし時炎暑さながら燒くが如く堪え難かりければ一同行軍を止めて休息なしけるが其場の頽れたる寺門に綫の小蔭ありしを兵卒等と讓り合ひて其の小蔭をば帝の御休息所となしまひらせたるにより帝には打ちくつらぎ御頭を小蔭にさし入れて疲れを休め玉へり後日に帝と此事を語らせ玉ひて彼の小蔭こそは當時我が身に

對して此上なき恩惠を受けたる心地せりと此時帝には小蔭に御休息ありしうち御足にて大地を蹈み玉ひしが忽ち土中より一の古物ぞ見えれける此古物は寶石にて古羅馬の玉オーギストの像を彫刻したるは其細工と粗なれども石質は希代の珍品なりと云ふ帝は之を彼の骨董癖あるアンドレオッシー氏に賜りたり後日に此の遠征軍にも加へり歸國の後に博物館の長たりしドノン氏が此の寶石の彫刻像を見て其容貌は帝の御風采に髣髴せりと申したるにより帝之を更に之をアンドレオッシー氏より取り返し玉ひけるとあん又其の後に至りて遂には皇后ジュゼヒンの御秘藏せらる寶物となりしが扨て其末之如何なりゆきしが分明ならずと此も余が歸國の後に親しくドノン氏より聞く所なりき

抑も佛軍が亞細亞に進行するには必ず亞弗利加の沙漠を經過することあるが此役クレベール將軍は先鋒となりて第一番に進發せしに茫

々たる沙漠中にて途を失ひて何れへか迷ひ行きたりけり其時帝の御旗本は半日程も後れて僅々の護衛兵のみ引卒せられて進まれしが途中にて思ひがけなく土耳古兵の大軍にハタと撞着し彼よりいと劇しく攻めかけたり然れども幸ひに日暮になりければ敵は我に伏兵あらんかとの鬼胎を抱き陣を引きたるにより危くも其難を免れ玉ひぬ然るに彼のクレベール氏が卒ひし先鋒の一隊と更に行衛知れざりしかば惣軍は終夜心配したりしが折よく此の沙漠を通行する阿剌比亞人の來りしによりて其の踪跡を認めたるや否や帝には直ちに「ドロマテール」駱駝の一種に打ち乘り玉ひ急地ぐらに馳せて進みける程にやう〳〵先鋒の軍隊に追ひ付きぬ然るに此の軍隊は皆疲れ果てゝ見えける中にも若武者と最早戰ふ氣勢も拔け不平の餘りに巳れが銃を打ち碎きたるもあり然れども斯るところへ帝の親しく馳せつき玉ひしを見まいらせ又其の勵げまし玉ふ御言葉を聞くより一同覺えず勇氣凛然として忽ち

其の初めに返りけり其時帝には士卒に向ひてやがて兵粮も飲水も後より着すべきを告げ論され且つ之を鼓舞し玉ふ樣縱ひ後より飲食物の來ることが延引するとも汝等は左までに落膽して不平を訴ふることにもわらぬに嗚呼汝兵卒よ唯潔ぎよく討死することゝ覺悟せよ」と又帝が沙漠中の御旅行にて大概彼の「ドロマデール」に乘らせ玉ひけり此の獸は天性健强にして能く艱苦に堪ゆるものあれば之を飼養するが爲めには別に人役を要することもなく其飲食は多くも貪らで常に少量にて足れり然れど甚だ感じの深き性質にて若し之を手荒に驅役することある時には忽ちに怒氣を發し行路の間も敢らに人に逆らひて驚愕せしむる擧動をなすあり帝の御物語に此の獸の走る時は迚だ鞍心地惡しくて恰も舟に醉ひたる如く嘔吐を催すことありと云々又此の獸の走る脚力は凡そ一日に二拾リュー(凡そ我廿一里余)を行くと云ふ帝が埃及に御滯陣の節は此の獸を多く募りて一隊となし以て軍

用に充て玉ひしが土人等は之を見てアナ無慘の事よとて之を憐れがりしと云ふ此の獸の乘手は其の背上に磐踞し居ることにて又之を御するには其の鼻に鐵環を貫きて之を使ふ一体此の獸常には柔順にして人に順れ易く乘手の下らんとする時ゝ背上にては相圖の鳴物を鳴らすとひとしく自ら足を折り屈め穩かに乘手を地上に下らしむる由又此の獸ゝ甚た重き荷を背負ひて之に堪ゆるの力あり旅行中其背上に負ゝせし荷物ゝ晝夜共に一切之を卸すことなく宿泊の場所に至るも荷物を着けたるまゝに唯檣の如き四脚の木をもて其荷を地上に支へ彼の獸ゝ右の檣の下に蹲踞りて眠り翌朝は又起き其荷を負ひつゝ旅立するとなり畢竟此の獸ゝ斯く重荷を負ふするには便利あるも車おそを引かする役にゝ立ち難し併しシリー地方に於て此の獸に大砲を曳かすることを習はしめ其佗有益の使役にも之を用ゆると云ふ

當時埃及の土人は帝の御事を稱し奉りてシュルタンケビール即ち火

大爺と申し甚た帝に敬服せり故に帝ゑ土人の爲めに特別の禮遇を受けさせ玉ひ其の一例を擧ぐれば帝が何地へ行かるゝも土人は皆立禮を行ひて帝を敬しまゐらするの意を表しける蓋し是は帝に限りて行ひ奉る禮式にして他人にゑ曾て見ざる所なり又土人ゑ部落の酋長を「チェーク」と稱することあるが帝には此の「チェーク」を歸服なさしめ善く之を待遇して其心を籠絡し玉ひしにより彼等も甚だ帝を尊敬し奉り遂に帝は彼の國王の如く土人を服從せしめ玉ひけり斯くまでに土人の信服を得玉ひし故によりて或時御命にもかゝるゑ一大事の危難を脫し玉ふ此頃マホメー敎の熱信者が驚を結び帝を目して法敵よと惡み嶌り窃かに陰謀を企てたるが幸にして土人の中に早くも之を探り知れる者ありて帝に密告しまいらせしにより帝には辛くも御危難を免れ玉ひ彼のクレベール氏の如く熱信者の毒手に陷るの轍を踏み玉ざりし但し此のクレベール氏とても土人の信用を得たりしが

其時酋長の一人を苛酷に驅役したるが爲めに頓に其の信用を失ひつゝ之れが爲め遂に非命に斃るゝに至れり又此のクレベール氏を殺せし刺客を捕らへ糺問したる時にベルトラン將軍も亦其の裁判官の一人にてありしと同氏は現に此の艦内にて食事の際に親しく余に語られし其時帝には同氏に向はせ玉ひて歐洲の余を謗誇する輩は皆彼のクレベール氏を殺したる我なりと揚言することなるが今足下の言の如く實に足下ゑ其刺客の裁判官たりし一人なりとの證跡を彼輩に聞かしめしならば彼輩は必ず云ふなるべし「然らば彼のクレベール氏を暗殺せる者は足下あらん足下縱ひ自ら手を下さゝるも必ず其の協謀者あらんと且つ又言ふなるべし「足下が陸軍大將とまで昇進したるは彼の暗殺の功によりて得たるものならん而して今斯く海外の孤島に遠流の身となりしは其の舊惡の報あらんとて打ち興せられぬ又說く帝が埃及に在り玉ひし時は常に土人等と親しく打ち語らひ玉

ひ胸襟を開きて毫も御隔心の体あく其の公明正大の御思召を示し玉ひ殊に事々着々御英断にまします故をもて土人等も皆ひたすら信服し奉りぬ今此に其一例を擧ぐれば帝が或時シリーより歸り玉ひしことありしに土人等も御出迎申しつゝ且つ相當の御用も候へべ仰せ付けられたしなど懇願に及びければ帝も之を雇ひ玉ひて運送の役を執らせらる帝には此の御物語の序に余にの玉ふ樣當時此地の村長ある者病氣の由にて其の悴を差出せしが其悴は恰も足下と同年輩にして体格も畧ぼ足下に似たるが其悴の少年は我と相並びて同しく例の「ドロマデール」に乘り途上は種々の談話をなしたり少年も我に向ひて「火大爺よ火父爺の今よりケールに御歸陣遊ばさるゝことに付て私は善き御忠告を申し上げたし」先づ兎も角も語り聞かすべしいよいよき忠告とあらば我も汝の言に從ふべし」其も別の儀にも候はず若し私が殿下の御身に候へば私がケールへ歸りたる後は第一に彼地の

賣奴商より多くの賣奴を集め其中より最も勝れし美女二十人ばかりを撰り拔き次に彼地の大商人より許多の寶石を集めて之を購ひ置き彼の美女共を綺羅びやかに粧ひ飾らせ其外も之に準じて十分に華美を極め晝夜歡樂に耽りたく思ひ候へども殿下には果して如何御思召し候や唯財貨ばかり多く集め蓄えて國王と仰がれ又强勇の人と尊まるゝも箇樣の歡樂おくては何の詮もなきことには候まじやと申す其時我れ之に答へて「其れも面白きことなれども斯く驕奢を極むる貨財を普く人民に頒ちて人毎に其の己の一生を保護するを得せしめなば亦一層の美擧にてあらずやとありしかども彼の少年は心のうちに敢て我が言を信ずる樣子の見えざりしとなり元來此の少年は亞剌北亞人種にしては立ち勝りたる氣質にてありしも後日には天晴れの人物ともなるべく其の擧動は甚だ活潑にしていと勇壯なる骨柄に見え己の部下を能く支配して威權を常に振ひ居たり彼の少年が成長の後

には必ず嘗て我に忠告せし目的を自らケールに於て自ら其の身に實行せるやも知れずと評じ玉へり又或時埃及の土人と不和を生じたる亞剌比亞人が埃及の內地に侵入し其の土人の一農夫を殺しけり帝は斯く聞かるゝや大に御逆鱗あらせられ急に軍令を下して必ず彼の阿剌比亞人を捕らへ來り之を皆殺しゐせよとの玉ひける此時恰も埃及の酋長等の集會せる折なりしが帝の御樣子を見て大に笑ひ且つ申す樣「火大爺よ其儀には思ひ止り玉へ決して彼輩に害を加へ玉ふな若し彼輩を害し玉ひゝ彼輩よりは必ず十倍の復讐をなし候へん且つ彼輩が名もなき一農夫を殺したればとて大爺の左まで逆鱗せらるゝことも覺え候はず然れど其の農夫は大爺の從弟(土人の通語)にても候ひしかと戲れながらに諫めけるを帝には聲を勵けまし玉ひて「否やとよ唯從弟といふばかりか今一層我が爲めには親しき者と思ふぞよ凡て我が配下に在る者共は皆是れ我子にひとしくして其の身命を保護す

る爲めとて支配の權をば我に與へ我を賴みとするにはあらずやと仰せあれバ幷み居る許多の酋長共流石に感じまいらせつゝ帝を拜して異口同音に申す樣「嗚呼美なるかな其の言や大爺の言は我がプロフェート(回敎の始祖馬哈默の尊稱)の如しとていよ〳〵尊敬なしたりける凡そ人の一生中に功名事業を企てゝ世に顯はれんと要する者は實に非常の擧動をなすにあらざれば決して能はざることにして現に帝の如きは古來の史乘中にも未た曾て有らざるの大業を建て玉ひしに世人は夫れ程に注目せぬを以て見れば亦人の其の名を世に顯はすことの難きを知るに足りぬべし昔し撒撒がリュビコン河を打ち渡り遂に外國に攻入りて其の王權を掌握せし例もあれど當時撒撒は許多の軍隊を引卒し殊に其の擧たる畢竟一己の私利の爲めに演じたるに過ぎず又昔し歷山王は少壯の銳氣と其雄畧の胸に旺にして抑ゆ可らざるにより船艦に搭して亞細亞洲に上陸し先づ其の或る王國に向ふて一大

戰を試みんとせり抑も此の歷山王は如何ある人ぞ元來王家の嫡子にして且つ其の手兵を以て屢ば戰場の危險を侵したるは自己の志望を達し世に高名を博さんが爲に過ぎず然り而して我が那帝と獨り王家の門閥あるにもあらす單に一箇人たるの資格を以て立身出世し當時埃及軍の起れる三年前までは其の御名も世上に赫々たらず帝が雲蒸龍變の媒助たるべきものは唯是れ前日二三回の戰勝と及び其の爲めに得られたる地位と其の御才略の外と一物もなかりしなり然るに帝は遂に三千万人の運命を制して內外を裁定し玉ひ外は衆敵を千里の外に驅逐し內は底止なきの爭亂を鎭撫し以て我か同胞たる蒼生を塗炭中に救えんものと晝夜御念頭に掛けさせ玉ひしにより其の埃及に在らるゝ時本國の又もや內訌紛起して其勢日々に切迫するとの注進を聞き玉ふや帝は慨然として大息し嗚呼今や佛國は實に危急存亡の秋に迫れり復之を彼の虛喝の政論家に委任し置くべきにあらずイザ

自ら往きて之を救はんと覺えずも聲を放て呼はり玉ひぬ因て決然決を投じて埃及を去り爲めに已に得たる名譽をも拋ち棄て九死一生の敵中を航して歸國せられ直ちに巴里に入りて其政府の紀綱を總攬し玉ひ其の紛擾極りなきの秩序を回復して優に撥亂反正の御偉蹟を遂れ玉ひ正理公道を以て社會を調和し加之從前國民の夢想だも及ばざりし程の一大名譽と佛蘭西の國光をして普く世界に耀かさし玉ひぬ抑も此の如き大事業も爲めに一滴の血一點の淚を洒かしめずして容易に其功を奏し玉ひし次第にぞある然れば帝が此の撥亂反正の偉蹟たる實に未だ曾て其の例なき御偉蹟にして決して餘人の企て及ぶ可らざるものなりと稱賛し奉るも誰の敢て之を誣言と認るを得ん後世若し虛心平氣にして帝の此の偉蹟を追想しまいらするる者あらば必ず や驚歎讃美して止まざる可きなり然るに當時人々と無識にも帝が埃及を去り玉ひし御擧動を妄評して帝と最早や彼の遠征の目的を果す

望なきにより卑怯にも帝の身を秘きて逃げ去りたるなりと申すもあ
りしと誠に見よ現に埃及に殘りし遠征帝は帝の去り玉ひし後二ケ年
まで尚は彼の地に滯陣せるにてわらずや尤も帝にて斯くまで永く滯
陣せしむるには及ばさりしと自らの玉ひしことあり又ベルトラン將
軍と現に當時最後の引揚まで彼地に殘りし人なるが將軍も亦其議に
就きては帝と同樣の意見にてありしと云ふ

扨て又帝が埃及を去り玉ひし後之に代りて遠征軍の都督となり殘り
し將軍と卽ちクレベール氏其人にぞありける同氏と其の同僚等に欺
かれて彼地引拂の儀を敵軍と談判に及ひたることあり然るに該談判
の箇條中に敵の承諾せさる所ありて更に開戰と決定し今は早や同氏
も已が功名を立て敵と雌雄を決するの場合とはおれり因て同氏も和
睦の念を斷ちて必ず彼國を討ち平げて佛國の藩屬たらしめんと必死
になりて盡力するに至れり故に同氏は前に歸國を促がし和睦引拂を

贊成したる者共を斥けて之と反對せる黨派を親しみ近けゝり若し當
時同氏にして長く世に存命ならバ我が一軍の危險に陷るる等の慮はな
かるべきに惜ひかな賴みとする將軍忽ち半途に落ちて埃及は遂に佛
軍に服從せしむることを得ざりしなり抑も同氏の沒後より軍中二派に
分れつゝムヌーレギイエーの二將軍互に角立し之を統御する者なく
遂には判然と黨爭をなすに至れり是れより後とても佛軍の勇氣と兵
勢は依然として盛んなりしも之を指揮するムヌー氏の如きと其の暑
の拙きこと大に前日に劣りたりとぞ

此のムヌー氏と元來愚將なりしかば當時英人が二万の兵を以て攻め
來りし場合にても我軍は之に倍する兵員ながら其の軍勢と彼我相似
るべくもあらざりしと云ふ又其の暑なさの一例を擧ぐれば英人が攻
め來るを見て我軍を各所に分ちて陣せしめたるに英人は惣軍を一圍
になし全力を以て突入せしかば我軍は互に相應ずる能とず思ひ〳〵

に防戰したりと或時帝は之を評し玉ひて「實に戰の勝敗は運命に在りと云ふも可なり當時若し彼我地を換へ我軍と一團となり敵軍をして其隊を分たしむるならば必定敵にと大敗を取り我に反對の勝利を得せしめしならんと云々

又此の戰に付ベルトラン氏の話に當時英兵が上陸の式と大に我が目を驚かしたり僅々五六分時間に五千五百の英兵は殘らずに上陸しつゝ神速に其隊列を立てたる有樣と恰も劇場の運動に異あらず此の如くすること三回にして各艦の惣軍は殘ふす上陸なしにけり此時我軍の英兵が上陸せんとするを支へ拒ぎし者は僅々一千二百人に過ぎざりしかど頗る敵を惱すまでに働きたり其の後數日を經我が將軍ラニュース氏と英兵の惣軍一萬五千の陣を手痛く襲撃なしたりけり當時同氏は僅々三千バかりの兵さへも卒ひざりしが元より功名に熱心せる同氏の事なれバ我一人扱け掛けして天晴比類なき働きして見せん

と無二無三に敵軍に突て入り此を詮度と奮戰せしかど遂には衆寡勢を異にして敵の爲めに敗走し其身も戰場に討死したりと

又英人が始めて上陸せし時には佛軍の思ひの外に多勢あるを見て少しく落膽の體なりしが當時佛軍は已に本國へ引揚に決せし由を聞込み反つて內心に喜びたりと云ふ

此の役や要するに佛軍引揚の後に於て其の遠征の結果を博したる者は英將のユッチンソンと云へる人なりけり此の英將が歐洲に歸陣して或人に語りける樣當時若し佛軍の實數を豫じめ知りしことならば容易に上陸とあさゝるべきも最初より佛軍は僅々六千によも過ぎしと自信せし故に却て難なく上陸に及びたりと云々畢竟此の訛傳の由來は英人が彼地滯陣の佛軍より本國に上申する文書を掠奪し又と當時佛國を傳播せる巷說などを見聞しつゝ斯くあるべしと信じたる次第なり此の訛傳の事に付き帝の余に語られけるは「元來佛人の癖と

して一たび事に倦むの心を生ずれば故らに惡しざまに云ひ立て又甚しく不平を唱ふることは實に一般の氣質あるを以て當時埃及の陣中より本國に報告せる文書に記るせる事共も其の過激に走りて實を失ふの類多く例へば其の文書中に最早埃及には佛軍を養ふべき一品の食物なしと云ひ或は戰毎に兵士の死亡夥しく殊に疫病の盛んに流行るが爲めに殆んど佛軍は一人も殘らず死亡して其種を盡すべしなど記載しありと云ふ然るに此等の數度の報告の中には其の文書の英人の手に入るもありて遂に彼の事實なりと認むる所となりたるに由れりとぞ當時英國の宰相ピット氏も亦之を信じて今こそ進軍の時あれとて遂に出兵の擧に及びたるなりと又茲に一の奇談とも評すべきは彼のクレベール氏が帝に代りて埃及遠征軍の惣督とあり始て本國政府に向け送りたる電報幷に屯在の佛軍より政府へ向け送りたる文書の巴里に到着せし恰も帝が「ブリユメール」月十八日の大事件卽ち政

府の大權を掌握し玉ひし時にぞありける尤も斯く內國紛擾の際なりしかば彼我往復の文書中に時々齟齬の廉あると免れ難きことにて殊に埃及軍の將校等と當時互に自己の威權をのみ張らんことを求め其の士官に申し付けて銘々勝手次第なる報告書を作らしめたるものと見えたり其の例は當時クレベール將軍の文書に最早佛軍と六千人まで減少したりとあれど當時監察官の上申書には猶は二万餘の兵員ありと明記したり又クレベール氏の報告に據れば最早全く軍用金の底を拂ひたりとあれど當時會計官の上申を以てすれば尙は莫大の金額を餘ませりとのことなり又クレベール氏の上申に我が砲隊と野外に暴露するのみにて最早彈藥も盡きたりとあれど當時調査官の明細表を一閱すれば數度の戰爭なすとも之に應ずる丈け尙は幾分の彈藥を蓄ゑたる旨を記入したり斯る不埒なる擧動ありしより帝は掌の玉ふ樣若し當時クレベール氏が一已の臆斷にて敵と和睦し其儘に

歸陣せしことならば我れ必ず嚴重に其の不埒を詰責して軍法に處する心得なりしと云々

右に記せる如く現に惣督の重任を負ひたるクレベール氏の文書にさへ斯る虚妄の事のみ多かりければ當時之に属せる將校幷に兵卒共が本國へ送る書翰には果して何等の妄說を記るしありしや實に計るべからざる程のことなり然るに英人等も斯る譯とも知らずして其の掠奪したる文書中にあるとあらゆる妄說を全くの事實なりと信じ種々に計畫して遂に出兵の義を決するに至れり故に斯る文書なども英人の爲めにはなか〳〵價ある證據物にして果ては頗る英人にまで損害を負はしめたりき帝も亦曾て語られしも「斯る味方の間に起れる訛傳の敵の耳に入り却て我が僥倖の利を得し類は是れまで度々ありし事共なるぞと

却て說く帝が埃及より歸國し玉ひし後彼地に留められし軍中より痛

くも帝の御事を讒誣せし文書の多く帝の御手に入りしことありけり抑も此の文書を筆せし者は是れまで帝が日頃親愛せられ頗る御信用遊ばされし人々にてありければ帝には殊に御不快の感情を起し玉ひしと云ふ就中帝が日頃深くも信用あらせらるゝが爲めに家産までもものして取らせられし恩顧の將校某氏の文書中に帝が埃及を立ち去らるゝ時二百萬「フラン」の軍用金を奪ひ歸られしとまで明記しあり然るに幸にも其の同時に彼地の會計報告書の本國政府へ達したるが帝には現に領收せらるべき御給料さへも未だ全額は領收せられざる旨を記載しありしによりて帝は彼の讒誣の爲めに毫も傷けられ玉ひざりしと云ふ又帝が此の讒誣一條につき余に語られける樣「我れ當時彼の書翰を讀みし時には覺えず大息なしつゝ實に人の心は賴み少なく忌まはしきものなりと感じたるぞや嗚呼我が一生涯の中にて此の時の如く他人の讒謗の爲めに深くも心を感慨せしめしことなし畢竟當

時我が一たび埃及を立さりし後之彼地に屯在せる者共之大早計にも
余之已に何處へか落ち失せて其身を隱くせしならんと臆測し各自に
我れ好き地位に立んと爭ふて故意に我を譏誣して政府へ上申する勞
なりし云々前に帝を謾誣せんと試みし將校某氏之歸國の後とて又々
帝の御氣に入らんとて百方心を碎きて其の謀計をあしたり然るに帝
は此の曲者を政府より放逐するまでには之をたしなめ玉之ざりしも
再び此の如き曲者の面を見るもうるさしとや思ぼされ敢て之を近づ
け玉之ず唯何となく「我は最初より左樣の人物を見識らずとて暗に其
の擯斥の御心を示されけるとあん
扨て又帝は後日に屢ば評し玉ひける樣當時若しクレベール氏か又は
デッセール氏が永く存生致し居るならば必ず埃及は佛國の藩屬に歸
せしあらん此の兩人之其の性質行狀は互に異りしが孰れも才畧拔群
にして多く得難き大將なりしと

而して帝の御評にはクレベール氏の才之天質に出で又デッセール氏
の才は敎育と其の經驗に成れり但しクレベール氏の才畧之非常の一
大事に臨まされば容易に見はれず其の平生之風流温藉を以て自ら其
の身を處したりき又デッセール氏は之に反して其の鋒鋩發露して當
る可らず殆んど古勇將の風ありて常に高貴の地位を熱望して已が名譽
心の爲めにのみ此世に生活せるが如き人物なり因みに帝の余に語ら
るゝ樣「此のデッセールの死せしは我が爲めにいと大なる損耗と思ふ
なり此のクレベールとデッセールの兩人は幼きより同窓の敎育に生
長し又同主義を執れる者なりしが故に永がく此世に存在せしならば
共に協心戮力して萬事に其便利を興へしことなるべし尤もデッセー
ル氏之クレベール氏を兄とし交るも敢て不滿の念を抱くまじ此のデ
ッセール氏が若し當時マランゴーに討死せざりしならば後日に獨逸
征討軍の大將をモロー將軍に之任ずまじきものを且つ玆にいとも奇

とすべきと右の両人の身の終りにぞありける彼のデッセール氏がマランゴーの戦場にて敵の大砲に打たれて斃れたる同年同月同日に於てクレベール氏も同じ砲羅にて刺客の刃に罹りしと實に不思議の事共ならずやとのことなり

○十月十四日　遥かにシテレーヌ島を認むると

扨ても今日こそはいよ〳〵三厄里那の見もべき航海の日割なりとて艦内の者共と躍れも頷を延きて海上を眺め居たりけるが海軍大将とわざ〳〵其旨を余輩に告げられぬ此日晝食を終はり将さに食堂を出でんとせし折り甲板にて誰とも知らず大音揚げ「陸地」と呼ぶるゝ聲しけり但し此の呼はりし十五分前に於て現に三厄里那の島影を認めたりと云ふ實に近年航海術の大に進歩せしことは此の實例にても知るべし何となれゞ豫め期したる其の日限に至りて毫も遅速おく其の目的の地に達せしことを目撃したるによれるなり畢竟此の航海たる地

球上の豫定すべき區域と其の豫定すべからざる區域とを精密に測量して其の地位に達すべき航海の遅速を明白にするにあれば決して斯くまでに確實なること能はざるものなり此時帝にも本艦の艦先に立ち出で玉ひ遥かに陸地の方を眺めさせらる夜に入りて本艦は全く碇を下して其の船足を停めたり

○十月十五日　三厄里那に到着の事

此日の午前に夜のほの〴〵と明け渡るや余は艦上よりあり〳〵と鮮やかに三厄里島を見ることを得たりけり但し最初に該島を望みたる時といと大なる様に覚えしかども最早本艦の該島に近寄るにつれ却て海上にて見たりしよりも小さく見えたり斯くて正午の頃にもあり しかば該島に穏着して錨を下しぬ是實に本艦が英國を出帆せしより茲に七十日巴里を立ち出てしより一百十日目と数ゆける抑も今日のあたり下したる錨の海中に沈み入れる音こそ懐れや近代のプロメッ

テー(上古の有名なる人物)が配所の岩頭に錵鎮もて其の身を繫ぐの始めとこそなりにけり

扨て已に該島へ着せし上にて見渡せば本艦に打ち連れて航海し來りしを或は中途に別れ或は後れたる諸艦は早や就れも遲滯なく先着なして居たりけり是れよりして考ふれば單に理論上より豫算して或る風の方向あるを目的としつゝ進行するは航海の實地上に於て未だ必ずしも信據するに足らざるを知るべきのみ

此日帝には常にかゝりて早朝より御衣服を改められつゝ甲板上に立ち出で玉ひ海岸の模樣あるを御覽せんとて艦先の方まで進ませられぬ余も御後に從ひつゝ見渡したるが該島は一本の立木もなくて赭く禿げたる岩頭のみ高く聳え其の間に村落の那處此處に點綴して見ゆるのみ又其の邊の平地或は海に面せるか又は低く窪める地あれば皆砲門を推し開き要害堅固ゐ搆ゐざるはなし其時帝には兩眼鏡もて方々を御覽せらるゝは余は傍に待しあがら心窃かに思ふ樣今此の帝が御覽せらるゝ絕海の孤島こそ實に帝の御一生涯を送り玉へん獄屋とも申すべく又或は御墳墓ともなるべき場所なるが帝の御心のうちは果して如何におはすやらんと餘所ながら帝の御容貌を伺ひ奉るに御氣色少しも平日にかゝらせ玉ふことなく更に驚るゝ體を見受け申さゞりし兎角するうち帝には御居間へ歸へらせられ余を召して例の如く既往の事歷を御口述し玉ひけり

又彼の海軍大將は早くも未明に上陸してありしが午後六時と覺ゆる頃いたく疲勞せし體にて歸艦しぬ此は帝及び余輩一行の人々を容るべき借屋を求めんとて上陸しつゝ諸所方々をかけまはりて爲めに盡力したりと云ふ余が聞く所に據れば其の盡力にて相當の建物は見出せしが是れとても其儘に住居すること叶はず今之を十分に修覆を加へんとならば尙ほ二ケ月を費すべく然るに余輩の艦內に起臥するこ

と已に三ケ月以上を經過し已に其の無聊の堪へ難きことなるが當初彼の英政府の嚴令には十分に余輩の住居の出來するまで堅く一行の者共を上陸せしむ可らずとの明文ありて余輩の困難は一方ならざりしかども茲に感ずるに餘りありては彼の海軍大將の覺悟にて斯る殘酷あることと實行するに忍びざるが爲め余輩に向ふて懇切なる情意を表する機此度の事件は拙者の一分にて後日の譴責を負ひ申さん卿等に乞直ちに明日御上陸あり

○十月十六日　帝三厄里那島へ御上陸の事

帝にも此日の午餐を畢り玉ひて本艦に附屬せる艀に召され海軍大將並にベルトラン將軍御供して御上陸の事と決定せり其時艦内の士官等は多く甲板の高樓に群り又水兵は一同艦先の方へ立ち騷ぎつゝか け集まりける但し此も帝の御出艦を見物せんとの意ゐはゐらで流石に是れまで互に三ケ月の久しき間を同し艦内に送りまいらせたる御

名殘を惜しみ奉らんとの情止み難くせめては帝と御別れ見送る心ばかりを表せんとのことゝ知らるゝなり

斯くて帝には艦長を御側近く召させられ告別の御言葉あり併せて艦内の士官始め一同にも好きに傳へられよと仰せ殘し玉ふ此時傍聽せし艦内の者共にて佛語を解せるこさらなり之を解せざる者も其の譯語を傳ねつゝ坐ろに無限の感情をぞ催ふされける

又帝の隨行員たる人々は午後の八時頃やう〳〵と上陸をけるが艦内の士官等は陸地まで も送り來りやがて手を握りて相別るゝ時とありて一同に始め日頃包みしまくことの悲しみをしめしける兎角して余輩はかねて取り定め置かれし場所に至り見れば帝には其家の一間を假りに客坐舖としておゝしけり此にて帝は余輩隨員が謁見の禮を受けさせられ暫くありて後に帝ゝ御自分の御部屋に入り玉ひ再び余輩を召して種々の御談話あらせらる此の御部屋とても別に艦内に異なる

程に綺麗とは謂へず普通の下等旅店に髣髴たるのみ
扨て三厄里那の市街とは云へど唯狭隘なる谷間に人家の打ち続きたるのみにて市街の両側共に禿山にて取り囲み其の地勢はいと迫りたる所なりき

附錄　ブリーヤール滞在中の記事

〇十月十七日　帝ブリーヤールに落ち着き玉ひしより一ケ月と廿四日間御滞留の事及びブリーヤール即ち薔薇村の地理幷に其の寒村あらし景況

此日の暁天午前六時に帝と海軍申大将及びベルトラン将軍と共に御馬上にてロンウードと申す所へ赴かれ帝が今後の御住居あらせらるべき家屋をば見分あし玉ひけり抑も此の家屋と凡そ三厄里那の市街を距ること二三里なりと云ふやがて帝には御歸りの道すがら向ふある谷つゝきに市街より少し小高き場所にて一搏への別荘を見つけ玉

ひけり帝にも此日も又昨夜の旅館へ歸らせ玉ふことを嫌らはせらるゝ其故は彼の旅館の出口〳〵には英國の番兵等嚴重に警護あして居り且つ其近傍にも見物人の群衆するにより容易に外出なし玉ふことさへ叶ず唯一室の内にのみ閉ぢ籠り居玉ふのみあれバ帝にもいたくも之を嫌ひ玉ひしなり然るに今此の別荘を見玉ひ其の離れ坐舗のいと閑雅なるを愛でさせられ遂に暫時此處に御滞留のことゝはなれり斯くて帝には余をも其の場所に召し寄せ玉ひぬ但し此と此頃毎日伊太利征討の事蹟を御物語りあらせらるゝを例となし玉ひつゝ此上あき御樂しみとあし玉ふことなれば一日も其の御口授を廢し玉ふことを好ませられず因て余を御召しありし次第にて余は直ちに彼の別荘にまゐりける

却て說く三厄里那の村落と申すは高く聳えたる禿山の間なる丘の上に在りて其丘と迤邐蜿蜒として海中にまで斗出したりき但し市街よ

りして此の別荘に至る間は馬車道ありて頗る其の道幅廣く又此の馬車道の長サ之凡そ二里程にて盡き其の行手之崎嶇たる羊腸の坂路となり左之山に沿ひ右は深き谷に臨めり又少しく進みぬれば道幅漸く廣ろくなりて平坦なる場所に出で木立茂れる森陰に人家四五軒立ち並びたるは恰も此の禿山中の「オワジーフ」沙漠中稀に草木の生ずる所を云ふとも評しつべし此の場所に一人の商家ありて其名をバルマンブと呼び見苦しからぬ一構の居宅ありて其れより又三四十歩ばかり右手の山の端に其の家人の遊息所を設けつるが此は日和よき折りなど或は新鮮なる空氣を呼吸せんが爲めに又は納涼の折茶なぞ飯む爲めに遊歩する場所と知らるる葢し此の場所こそ之彼の海軍大將より帝が暫時の御休泊所として借入れたる別荘にて帝之已に今朝より御坐あらせられけるが此日余は帝の御召しによりて前に記るせる坂道をたどり〳〵て歩みつゝ山を那方へ越へ下れバ遙かに帝の御姿を見認め暫し佇立み御樣子を眺めまねらするに帝には例の如く少しく御身体を前に屈められ両手をば背後にまはし玉ひつゝ其の御衣服とても常の簡素なる物を着せられ彼の有名なる帽子を戴き玉ひけりやがて余が御側近くまねり居られし時は帝にも家の出口に立せ玉ひて「ブォードビイル」と云へる詩歌の一句を心靜かに打ち吟じてあらしれが余を見玉ひて「オヽ卿之夫れにまねり居られしか何とて子息をも同伴せざりしぞ」と仰せありければ余之畏りて「萬一陛下に對して不作法の擧動あるか又之御目障りにもあらん歟と憚り倦ひて愚息は取殘しまねりて倦」と御答へ申上げしを帝にも亦いと懇ろに「否やとよ卿には片時も子息を離れては叶ふまじ速かに連れ寄せられよ」との恩命を蒙りぬ

嗚呼帝には曾て百戰の馬上に沐雨櫛風の御艱苦を耐忍し玉ひしも未だ今日の如く御住居の斯く狹隘にて且つ之御不自由におはせし例しはあらざるべし抑も此の別荘の搆造は二階造りの小家にて其の前後

に出入口あり又窓とても僅かに二ヶ所開けたるのみにて其の窓の外側には戸もなく又窓掛けもなく扨て家の中にも唯一脚の倚子を置きたるまでなりし余が始めてまゐりし時にも帝に從ひまゐらする二名の供は帝の御寢床を購ひ求めんとて市街に出でゆきたれば帝は唯一人此の家におもしていざや遊歩せんと戸の外へ出かけ玉ひしとなり然るに此家の四邊はごろ〳〵と岩などの碎け散りて大地を蔽ひ更に平坦なる所を見ざりしかど帝にも余が手を執られて幾度となく御逍遙ありつゝ御機嫌いと美るはしく種々の御物語あらせられける兎角するうち日も早や西に沈み果てゝ其の物淋しきこと謂ん方なかりければ余が心に深くも懷舊の感情の忍びかねつゝいとゞ胸ふたがるを覺えぬ嗚呼斯る絶海の孤島に優に余と打ち解けて語らひ玉ふ君こそも嘗つて宇内を籠絡せられし英雄の其人にましましける此の尊き我君の親しく御物語あらるゝにつけても余が限りなき感情の溢れ

來る其の切なる心こそは曾て目のあたり帝の時めき玉ひし大御代を知りし者ならでは解し得べくあらずかし實に帝の御稜威の盛んなりし頃には帝が一片の勅書もて其の支配を蒙りたる各國の王位をも與奪し玉ふに何の難きことありしぞ又其の昔し「チュイユリー」宮におもしける頃は左右待從の人々も申すに及ばず其の朝廷に仕ふまつる文武百官皆な帝の御前に肅然として心まことに畏しこみ敬ひ奉らぬ者とてなかり斯る御有樣を實地に目擊したる者ならでも誰か余が大西洋より尚ほ深かる今日の感情を酌み知るべき其佗當時各國公使幷に其の貴族輩より或は一國の王位に仰かるゝ方々に至るまで皆な帝の御覺え自出度からんことのみ祈りて戰々兢々安き心もなく日夜に敢て怠る色見えざりし有樣などを思ひ出るに一として余が感情の媒ちならぬはなく帝が當時の御有樣は今も尚ほ恍乎として余が目前に在るの想あり余に於ても其の帝に對し奉る昔日の尊敬心も更にかもる

ことなきを覺ゆるおり

やがて帝には御寢所に入りて打ち臥し玉ひしが其の御枕の傍なる窓の戸もあくて明け放したる儘にてありき元來帝は空氣の冷ゆるまでに流通する所に居玉ふことあれば必ず感冒し玉ひ又御齒の痛み出さるゝ御生れつきあることと余も豫ねて心得居たるにより余も手の及ぶ丈は立ち働きて窓の隙間を繕ひ塞ぎけり扨て又余が難澁の有樣は更に甚しく余が寢間も恰も帝の御居間の上に當る二階に在りて其の廣サ七歩四面もあるべき中に倚子さへも置かず唯一脚の寢床を備ふるのみ是れぞ余及び愚息兩人の部屋にてありしが愚息にも別に寢床の用意もなければ夜一枕床板の上に枕を置きて臥さしめたり抑も箇程まで辛き目に逢ひたる余等の心中にも不平に堪へがたかるべきに却て左はなくて偏に帝の御傍に起居することを得るの嬉しさに更に不平の念の起るべくもあらず此の部屋も常に帝の御聲をも親しく

聞きまゐらする程に間近からしなり又彼の二人の僕には別に部屋もなければ憐れや戸の側なる床板にがバとばかり外套を引しかつきて ぞ打ち臥しける因みに記るす帝が始めて此のブリーヤール即ち此の名稱も佛語にて薔薇と譯する寒村に御滯留せられし時の御實況と知るべし

○十月十八日　再びブリーヤールの地理幷に其地の庭園の事帝が別莊の主人の娘に出逢ひ玉ひし事

此日の正午に余は帝に御陪食申したり然るに帝には勿体なくも食卓の拭布又御口拭布さへ持たせ玉はず其の御食料とても昨夜の餘り物を供へまゐらせたるのみにてありき

却て說く此の隣家には英の士官一人幷に下士官二人宿泊し居れり此の下士官は常に余等の擧動に注目して陸軍の兵式を用ひつゝ絕えず四邊を巡邏して監視なしけり

斯くて帝には御晝食畢りて二三時間は讀書あそばして居玉ひしがイザ此の近傍の目新しき事物を一覽して土地の案内をも知らばやとて遊歩を思ひ立ち玉ひぬ余も帝の御伴して立ち出てつゝ本宅の背後を下りて一筋の小徑に尋ね入りける此の小徑の傍には棘の生籬あり之に沿ひて谷へ下り夫れより二百歩ばかり進みて一つの花園あり其の門扉の開きたれば園内を見渡すに長方形に作りたるものにて高低互に趣きをなしたる間に一條の徑をつけたり其の入口に一本の圓ろく刈り込みたる立木あり又其の奥の方に園丁の黒奴が住める二棟の小屋を搆へたり斯くて余輩が此の園内に立ち入るや否や此家の娘と覺しく二七ばかりの少女二人帝の御跡を追ひ來りけり余も其樣子を見るに一人も氣輕るにしてそゝしく今一人は落ち着きたれど素直すぎる達にて姉妹共に少しく佛語を解したり右の姉妹の少女は殊勝にもさま〴〵帝に慰め申さんとて園内を導きまわらせ取りとまりも

おき樣の事共をいと馴れしく御話し申しかけたり流石帝にも思ひがけおきことなれば少女の話しを聞き面白きことゝ思され爲めに御心を慰め玉へり然れバ帝には彼の少女に別を告げて花園を立ち去り玉ふ折り余に向ひて「今日も我々も假面曜より歸る心地ぞする」とて打ち戲れ玉ひぬ

十月十九日より　佛國少年の敎育方に付帝の御說ありし事　○隣
○同二十日に至る　家へ御立寄りの事

此日帝の午餐の折り愚息にも御陪食仰せ付けられたり斯く有り難き御寵遇を受けたる愚息が其身の喜は申すもなか〳〵愚のことなり但し愚息が斯く御前にまわりて忝けなくも龍顏に咫尺し奉るのみか親しく御言葉をかけさせられ又時としては御談話申し上ぐるなどの榮を得たる實に此時を始めとせり然れバ愚息の心にも深く身の面目を施したることゝ知るべし此時も食卓には尙は掛けの用意もなし其の

食用品と三巨里那の市街より取り寄するものにて僅々二三品の粗食に過ぎざりし又此日は鷄肉を供へありしに帝と御手づから刀を執りて之を截りつゝ余等に分配なし玉ひつゝ自ら其の手際の巧みあるを感せられし御樣子にて一抔て久しく國樣の事をもなさでありし唯國政の利害得失或と彼の伊太利征討の戰略などに心を委ねてありしが故に斯る業には氣を留めざりしも今之を試み見れば思の外に其の手ぶりを忘れざりしと打ち興せられて語り玉ひぬ

又帝には平素頗る咖啡が御好物にて御至要品の一つなり此日の咖啡は其味甚だ惡しかりしによりて帝には恰も毒藥を呑まれし如くいと不興氣なる御顏色にて忽ち之を打ち捨てられ余等にも用ゐまじきぞと仰せありけり

此時の事なりしが帝には古代人物の像を彫刻したる金具打ちたる御煙草入れを御所持にて其像の周圍に希臘文を彫りつけあり然るに

帝にも其の文字に讀みかぬる所ありて其像の果して誰なるやを知り玉ぬ由仰せありて之を余に玉して讀み見よとありければ余は謹んで之を拜見するに容易く讀み得べからずと思ひしまゝ其旨を御答申せしに帝は打ちはゝゝ笑み玉ひて「足下も亦我より勝れて博學にはあらざりしぞとの玉ふ折り愚息は畏る〳〵進み出でゝ之を讀みつゝげしてその像の名はミートリダットデメトリュースポリオルセート等の諸人物にぞありける然れバ帝にも愚息が未だ少年の身にてありながら其の學識あることを深く感じ玉ひて足下の子息は未だ年少なるに斯くまで學問の進歩してありしき誠に嘉みすべき次第なり」とて更に愚息に向ひ玉ひ是れまで就學したる學校幷に其の教師のことなどを御尋ねるりし後再び余に仰せある樣「嗚呼余は彼等の少年を誘導さするの任をも負ひたりき彼の少年輩こそ他日我が爲めに其の地下に呑むべき寃の罪を雪ぐことに尽力する者共あらん凡そ世に巧巧の器物ある

を見れば則ち人は必ず其の製造者を賞讃あすべし乃ち此理に同じく我れ發きに本國の少年輩を誘道するが爲めに良法を設け充分に我と心を用ゐたることを了解するに至りなば縱ひ世に我を譏謗誹議する者ありとても必ずや自ら叩頭して已の罪を謝する時來りぬべし抑も我を誹議する者共と皆な我が一世の事業を以て我が一人の爲めにあしたりと謂ふことなれども果して我れ正當の道理に由らずして自已一身の威權を鞏固ならしめんと思ひしならば必ずや本國の少年輩が其の將さに發達せんとする智識を壓抑せしことならん然るに我と唯に之が壓抑を試みざるのみならで其の力の及ぶ丈け心を盡くして少年を敎育する方法を設けたるなど就中我が嘗て老案せし大學院の組織の如きは實に精確完全にして果して之を實施したらんには大に國家の神益となるべきを信ずるなり然るに又一人の兒漢(其の名は明白に指し玉はず)我が計畫を妨げつゝ遂に之を破壞せしめたり剩つさへ彼の

兒漢(此人の名は聞き取り得ざりし)惡人が故意に我が妨をなしたる證據と現に其後新政府の代とかりたる時自ら左も得意顏に之を誇りしことゝもありし」と語らせ玉ひぬ

夜に入りて帝には余と話しながらに隣りなる彼の商家に音づれ王ひけるが折りしも主人は病氣(グード)病と筋骨の時々腫る〳〵症なり」の心地なりとて寢卷の儘に床に臥し居し其妻幷に昨朝花園にて出逢ひし姉妹の少女は其傍に待べりて種々の談話の末に彼の人情小說のことに及びければ一人の少女と嘗てマダームゴッタン氏の「マルチルド」を云へる小說を讀みしことをありと曰れければ帝にも前年其書を一見せなく(殿下よマルチルドの友垣なりし彼の姬君と今も尙は世に存らへしと覺ゆるとの玉ひしにより彼の少女と喜べる体なりし此時同席ある一人の男少しく佛語を解したるが今の談話を聞き居たりしにやがて坐を起ちて帝の御前にまゐりて思ひがけしたる体肥太りて方面ある

おむし候やらん」と申せば帝は威儀を正して御答あらせらるゝ樣否あ彼は最早身まかりて黄泉に赴きたり」と聞くより彼の男も俄に悲しみを催ふしつゝ其のいかめしき顔打ちしはれ限中涙ぐみて見えにけり後に帝の余に語られけるは「我れ彼の折りは全く彼男の爲めに誑かるゝと思ひしよりよき程に答へ置きたりし」と

又說く今一人の少女は稍物の道理を弁へ居りし然れど此の土地の人々は元來人の血統系圖などには注意せざりしものと見え或時妹の方ある少女と其の聊か佛語を學びたるを示さんとてフロリーアン氏の著せし「エステール」の小說を讀みかけしが其の中あるガストンドフオワー氏の傳記に至るや少女は帝に向ひて「此の陸軍大將と殿下の軍中に在りて殿下の寵遇を受けしものなるか又は許多の戰場を運つよく免れて今も尙は存生せるかあと質問せるいとおかしかりき

○十月廿一日

今朝海軍卿には帝の御見舞として參られ入口に立ちつゝ戸を打ち敲きておとなひ申しけり其時若し余の在らざりせば帝には御自身に起ち出てられ戸を開かるゝの外にすべなし左なくば海軍卿には何時まても戸の外に停み居たることあるべし

又島内の各所の市街に分れて寄留する隨行員一同は此日を以て帝の御見舞に參謁なしたり因て互に其顔を相見ることを得てかゝる〳〵我が身の上のいとも悲しき事共を語りあひければ流石帝にも一入感玆させ玉ひて少しく御愁傷の体に見受けまゐられしも理りあれ

○十月廿二日より　余輩配所の厭ふべき有樣幷に其の困難にてあり同廿四日に至る　し事

嗚呼余輩は元來英人の親切なる掛合を承諾して已か一生を托したる次第なれバ余輩は英人より懇待を受くるの權利を有せる者なり然るに英人は非道にも此の權利を破壞せしのみならず更に一層の苛虐を

加へ余輩をして活きながら地獄に陷るの有樣に逢はしむるに至れり
現に目のあたり余輩を島さへ通はぬ絶海孤島の果てに追ひ遣り其の衣
食住より何から何まで不自由あることのみにて無限無量の苦しみを
極めしむ抑も此の三厄里那は是れぞ世に恐ろしき西比利亞の配所と
も云ふべく唯其の相違する所と彼れと寒地にして此れと熱地なると彼
は莊々たる大國なると此は彈丸黑子の一小島たるに在るのみ
抑も帝には嘗て其の御威權と高く輝きて大陽の天に中するが如く各
國帝王の廢立さへも唯我君の一手に掌握し玉ひし御身なりしに盛者
必衰と世の理りとと申しながら今と憐れや草も木も生ひ立ぬ岩の上
にいと小やかなる賤が伏屋の御住居窓はあれども窓かけも朝な夕な
の調度さへ心にまかせぬ荒磯の流人とこそは成り果て玉ひ然れば帝
が此頃の御有樣は申すもなか〳〵愚かにて仮寢の夢の束の間も衣更
へさせ玉ふにも御食事時も御書見も同じ一間の其外に更に設けはな

かりけり偶ま塵を淨めんと掃きつ拭ひする時は二帝と暫く出て退か
れ戸の外にこそ立ち玉ふ又朝夕の御膳部とても恰も獄屋の囚人を賄
ふ如く遠方より時々運び來りつゝいとも粗惡の物なめり斯く人生に
貴重ある食物さへも乏しくて第一麵包や酒などは佛國製とは品かは
り殆んど口に入れ難し此外飲水咖啡バタ食脂の類もまた拂底せるも
のから僅に飢を充つるのみ扨て帝の御養生にいと大切なる湯浴さへ
此頃絶へてなし玉とす且つと馬上の御遊歩とても此の場所にては御
自由に試み玉ふこと叶とず隨行員の人々は所々に追ひ分けられ互に
二里餘も隔りつゝ折り〳〵帝の御許へ伺候に來る其都度に英兵之を
警護したり且つ人々の身に帶びし武器と殘らず剝ぎ取られ或は歸り
の時刻を過まり又英兵の陣營より示めしの規則を背きなば其夜は自
宅へ歸へされず陣營中に留め置き痛くも之を懲戒するなど辛き目見
ること屢ばありき斯く我が君も人々も此のいと狹き岩の上に流し捨

てられ人の爲す苛虐の責めと天の爲め苦熱にいと〳〵堪へ難く我が頭腦をば苦しめける若しも外に之行ふべき道なきこと〳〵知るならば尚はあきらめて忍ぶべくまことと慈惠を加へくれ自由を得させん程なれバ斯くまで虐けた置かずとも衣食之さらあり住居までいと寛るやかに暮らすべき手立あきに之あらざるを斯く辛らき目を見することを返へす〳〵もうたてけれ

畢竟斯る絶海の孤島に帝を配流しまゐらせたるは全く歐洲各國の帝王等が其の帝に對する平生の私怨を晴らさんが爲めなる申すまでもあく明らかに知らる〳〵なり若し帝の流刑にして單に公平なる政略上の目的に出てたらんにと何にとて斯くまで苦しめ奉るべきや必ず他に相當の處分をもて帝を尊敬し且つ之を優待して其の天年を送らせ奉るに於て何の難きことのあるべきや

其時余輩一同は帝の御許に參會してありけるが帝には前に記せる如き種々御困難の有樣などを御物語あらせ玉ひし後更に一段高く御聲を勵まし玉ひて「咄英人等は如何なる殘酷の取扱を以て我々に試みんとするか今や實に絶体絶命の場合にまで差し迫りたるぞ彼の英人は唯我等の權利を剝奪して非道の所分を施すのみあらず又此の如き恥辱を與へ剩さへ未來永劫此の活地獄に沈めたるぞや若し果して我を以て已に害ありとせば彼れ英人は何にとて速かに我を殺して其の害物を除かざるぞ卽ち一二發の砲彈を放つて余が胸部若くは頭腦を打ち貫かば難なく其事了るべくすれば少しは彼等が所置の果斷なる手際も見ゆるならん嗚呼今我が此の逆境に身を委ねて彼等の爲すがまに〳〵惜しからぬ餘命を送りて敢て之に違背せざるこ唯足下等の中には最愛の妻子ある身をもて我に從ひ來りしことを思ひつゝ忍びがたき今日を忍ぶにこそあれ若しも足下等の茲に在らざりせば我は將さに百事を拋ちて此世を打ち捨て寧ろ其の飮食までも兵卒輩と

同等に降さんと思ふあり抑も歐洲各國の諸王は果して何等の意を以て我が天錫なる至尊の威徳に對し斯くまで永久に侮辱を與へんとはするぞ要するに彼等が我を遇すること此極に至れるは彼等と自ら其の神聖ある位地を墜すものにて卽ち自ら此の三厄里那に自殺したるに異ならざるに彼等と何ぞ已に反省して此の道理を悔悟せざるや嗚呼曩きに我れ屢ば彼等の軍を打ち破りて其の國都に攻め入り彼等も亦自ら降虜の身となりし例あるにあらずや當時の情況を回顧せば果して如何なりしぞ彼等と誠に憐れむべき体にてあらざりしや其後我こそと人民の公けある撰擧により且つ其の戰勝の功勳により又宗教上や政畧上幷に婚姻等の緣故を以て彼等と現に兄弟の義を結びたるぞ然るに今や彼等と敢て余に加ふるに此の殘酷非道なる所置を以てしたり此の事たる果して正理公道に背きて爲めに歐洲人民の感觸を惹き起し來ることなきか若し果して此の事にして正理公道に背く

ものとせば彼等も亦遂に之其の終りを全くして世に其の幸福を全ふすること難かるべし足下等は唯宜しく此の一大不平を世に吐露して爲めに歐洲人民に一種無限の感觸を與ふることを務むべし獨り我が天錫の性格より達觀し來れば此等不平の事之猶は遙かに我が尊榮なる威徳の下に在るものにて毫も我が心を動かすに之足らざるぞや唯我が今日の斷案とする所は起つて之を命令する地位に進まんか否らずんば寧ろ默し退くに止るのみ」と

却て說く其の翌日に至り一人の海軍士官が帝の御居間の戸をたゝき案内も乞はで直ちに帝の御部屋まで入り來れり其時余は帝と共に例の編輯に從事し居たり但し此の海軍士官の來りしは無禮の擧動にて之ありしかども其の心底は全く帝への御信切に出てたるものにて右の士官之此度同航なし來り或る船の艦長にてありしか其の近日歸國するに付き帝に於て御用の儀にあらせられ候へば何事なりとも本國

へ傳達致し候べしとてわざ〳〵尋ねまゐり其時帝は右の士官に向き御身不幸の地位にある前日の御演說を反覆して述られ且つます〳〵御聲を勵げまし玉ひて彼の英政府の所置に對し最も確實にして最も嚴正なる御演說に及ばれける因て余は傍より直ちに之を口譯して傳へければ士官之聞く度に嗟嘆しつゝ自ら矢つて歸國の上之必ず只今の御議論を政府に傳達しまゐらせんと申して立ち去りけり斯くは申せしものゝ彼が歸國の後に今目のあたり帝が述べ玉ひし凜然たる語勢などを其儘に彼の政府へ傳へ得べきか其は覺束なきことに思之る勿論にて帝には其の御演說をば一々覺書として渡されしが彼れとも其の筆記の上にては御演說の雷霆電擊せる御精神を其儘に寫し能之ざりしを能く了知し居ることとなるべし

十月廿九日より
同廿七日に至る

ブリーヤール軍中用の御手カバンの事幷に他の大カバンの事

ブリーヤールに於て生徒の狀態帝が用ひ玉ひし

其の箱の中に藏めおりし器物の事彼の「ナイユ

リー」宮王に於て見出し玉ひし帝を訓誘するの書

面幷に王室に屬したる物品の事

此日帝には朝まだきより御衣服を改められ戸外へ御遊歩あらせられ余輩が朝餐に就ける十時の頃までは尚ほ久しく御逍遥ありて玉ひける斯くて又余は例の如く帝の御前に侍りて編輯に從事したるが乃ち余之昨日の起稿と愚息に淨書なさしめ之れを御覽に入れ奉れば帝には親しく之が正誤などし玉ひ畢りて又明日記載すべき材料の御口授を始めさせ玉ひけるやがて午後五時頃にもなりければ余之帝に隨ひ申して庭上を散步しつゝ最早六時頃となりて御膳部を市街より送り來りしならんと思へば帝諸共に立ち歸りぬ

扨て昨今之何とも日の長きに困玄果てたれど又夜に入りては更にわ

びしきこと謂ㇾん方おし殊に余は是れまで將棊の遊びを試みしことゝもなきにより人にまさりていと無聊なるを覺へたり然れば其道を習ひたく思ひしことゝも誰につきて學ばん樣もなかりけり尤も「ピッケー」(骨牌遊びの一法)ㇾ余も嘗つて聊か心得居たることあれば或時帝の御相手を致せしも固より拙た下手なりしかゞ帝にも早くそれと悟り玉ひ斯くてㇾ餘りに興薄し折を見て敎授し道はすべしと仰せありしが其後能き折りもなくて止みにき元來帝には深く骨牌の勝負を好ませ玉ひしゆゑ時として主人の家にまねられ彼の姉妹の少女共を御相手おゝ「ウヰスト」(亦骨牌遊びの一法)を試み玉ひける然れど平日多くㇾ御晩餐後より余輩を御部屋に召し玉ひ其の室の狹くして御道遙などㇾ思ひも寄らねば唯椅子にのみ倚り玉ひて四方山の御物語わらせらるゝが常なりし或夜の事ありしが帝は御持參ありし軍中用の御手道具入れ置かれし革箱を取り寄せられ其内を彼れの此れのと改め見られしに其の革箱をは余に賜りつゝ且つㇾ仰せある樣此品こそㇾ我が年來久しく用ひ來りし物にて彼のナースステリッツの戰の始まりし其日の朝より此品に手をふれ今日まで一も絕えず我が坐右を離さず用ゐ來りし物ぞとて傍に立ちし愚息の方を見遣り玉ひつゝ「嗚呼此品も遂には小エマニュエール(卽ちラスヤースー氏の子息を云ふ)の持物に歸するあら凡そ彼が八十歲になりし頃には我々共は最早此の世に在らざるべきぞ然れば隨ふて此品もいよ〳〵世になき珍器ともㇾやさるゝことならん其時足下の子息ㇾ必ず云ふなるべし此品こそㇾ我が父が嘗て三厄里那に於て那帝より賜りたる貴重の物ありと」斯くの玉ひつゝ打ち興せられぬ

帝にㇾ又右の革箱よりも一層大きなる箱を取り出で玉ひ其中より御家族の寫眞紙幷に諸方より獻上したる物品あど御覽じける卽ち其の寫眞には皇后ナマープルの皇后ジュゼーフ公其佗の御連枝の方々幷

に羅馬王等にてありき又其の物品には彼の羅馬法皇より帝に贈りまゐらせしいと高價の品幷にヒイール、ルグラレの像を着けたる煙草箱又シヤル、カンの像ある小箱其外チュレニマの像ある箱幷に帝が常に用ゐ玉ふ御手箱とて揩撒阿歷散得シラーミットリダットの像を刻みたるあり又別に帝の像を刻み「ダイヤモンド」も て飾りし御煙草入れ數個ありけり其時帝には「ダイヤモンド」の飾りなき煙草入れのありしと探かし玉へども見當らざりしかば從僕を召して之を穿鑿せしめられしにあやにく其の煙草入は外の手荷物と共に三厄里那の市街に取り殘しありしなり若しも其品の現に見付けられたらんにと必ず余に取らせ玉ふべきと余窃かおあたら賜物を失ひつる心地してけり

又彼の路易十八世が「チイユリー」宮を落ちたる時其の机上に取り殘し置きたる許多の煙草入れの帝の御手に傳はりし物を出して御覽ありけるが其中に黒色を帶びて象牙の如き質に路易十六世と其の皇后幷

にエリサベット夫人の像と彫刻せるあり其像は就れも三角形に位地を取り像の周圍に之神使の像を畫きてあり又其外踈畫にものせし狩の圖を彫刻せるもありけり此と別に貴重の物と申す程にはあらざれど唯其の制作者が貴人なるによりて取り置かれしものなり蓋し此の狩の圖をものせしはマングーム伯爵夫人の自製あるべしと云ふ尚佗に一個の箱ありしが此箱にはフロブアンス姫君の像ある樣に覺えぬ要するに此等の品と普通の雛形なれども唯歷史上に緣故ある古器物として之を貴重するに過ぎざるのみ

因みに說く本年三月廿日の夜帝が巴里に到着ありて「チュイコリー」宮に入らせられし後或日路易十八世の机上に置きありし書類を御一覽ありしところ其中にマデールにて死せしアブアレー氏宛の書翰數通ありて就れも十八世の親筆なり蓋し考ふるに此は一旦先方へ達したる後更に返り來りしものあるべし又其佗にも十八世の親筆に係る極

秘密の書類多くありしが如何にして此等の書翰が再び十八世の手許へ返り來りしや更に解し難き事共にぞある又此の秘密の書中に長々しく五六紙に及びたるものありて其の文章は頗る明晰にていと巧みにものしたる書きざまなりと此の御物語わらせられぬ又其の書中に或る婦人へ宛てたる書翰ありしが其文に「朕が卿を信愛するや否の問題は卿に於て別に判決を要するまでもなく了解せらる所なるべし畢竟朕が喪中の日限を短縮せしも實は卿の爲めにせる」云々とあり又此の喪と云へる事につきて其義を布演なしていと長々と博士振りにものせし文章を記しありたり帝にも此の書翰は果して誰に宛てたるものあるや又此の喪とあるは何人の喪あるやは知るに由あしとの玉けるが余も亦其の何の謂たるを知る能はざるものなりき

帝が再び寶祚を蹈み玉ひし御時或る一人を抜擢して顯榮の地位を與べられしが思ひきや其人が拜命の數日以前に於て現に帝并に御家族の事共をさん〴〵惡しさまに罵りたる書翰の御手に入りしことわり若し今少しく前に此の書翰を見玉はんにとなか〳〵に御抜擢などを蒙るべくもおらざりし蓋し此の書翰と云へるは同じく彼の路易十八世が机上の書類中に在りしものなるべし

前に記るせし如く當時の書類中帝の御事をば惡しさまに云ひおしたる書翰あどむいと多く在りける由就中最も惡口雜言を極めたる書類のありしと多く當時十八世の宮内卿兼王裝調度掛長たりしブラッカー氏の詰所なり但し其の書類には當時行政務の考案并に意見書又は献言書等にして其文を見るに帝が再び佛國に歸らせ玉はんことなどは夢にも思ひ寄らざる樣子にてありしとなん抑も此の書類を極め多くして其の要領のみを寫し取らしめんが爲めには少くも四人の專務委員を要する程にてありし因より帝には當時此の專務委員等が合体して右の書類中の事實を隱蔽せんとの御疑念もおかりしかば全く

四人の委員に打ちまかせ置かれしも今となりては却て一人の正實ある者に委任しなし玉ざりしことを御後悔あらせらる又此外にボーリイヌ姫君(卽ち那帝の御妹にして共にエルブ島に赴かれし御方なり)に從ひまゐらせし或る侍女の認めたる長文言の書翰ありけるが其の書中には已が主人たる姫君幷に其の妹君の御事までも誹謗し又彼の男と云ひし帝の御事をも悪しさまに書きなしたり然るに誰の業なるにや此の書翰の文中なる末段を刪り更に甚しき罵詈の語を加へあり又同筆にて餘白に〔印刷に付して〕可なり〔と〕追書してあり故に若し帝の巴里御入城が今二三日も後れたらんには此の書翰も或は世上に流布せしも知れざるなり當時政府中の高位を占めたるなり上りの婦人にて從來の帝の御厚恩を蒙むりし者なるが帝の立てさせ玉ひし内閣の破れていよ〳〵帝をも追放するに決定したる時ソレと聞くや否や己が朋輩の者へ左の如く書き送りし手翰あり〔某君よ我が夫は只今歸り

いと疲れてまゐりぬ然れども疲れし程の甲斐あり彼の男を追放することに決定なしたるぞやがて我〳〵はブールボン家を戴きまゐらすることを得べからん誠に目出度事共なめり今より後は我〳〵もまことの伯爵夫位と仰かるゝ貴き位を占めてべるべき云々とありし又帝の書類中帝に對し奇怪にも甚た無禮を加へたる書翰を見出されけるが卽ち其の書翰は昨日までも帝に依賴し奉りて御恩澤を蒙りたる者の手並にまぎれなかりける帝も流石に始めて御目にふれし時に乙御逆鱗のまり寧ろ箇樣の書類乙印行して之を世に公けにし是れまで彼等に與へたる恩惠をば拋棄せんとまで思ひ玉ひしかども更に思ひ返し玉ふことありて其儘に止みけり扨て帝の仰せらるゝ樣凡そ人といふ者乙うか〳〵として定操なき者ゆゑ若し彼等が他日又改心して我が許に來らざるも保し難し若し又來りて後に再び義に背く擧動あらば其時には前の不屆を譴責せば夫れにて事乙足りなんと考へ玉ふ

により其の書類を印行するとは思ひ止り悉皆之を焚き棄させたりと

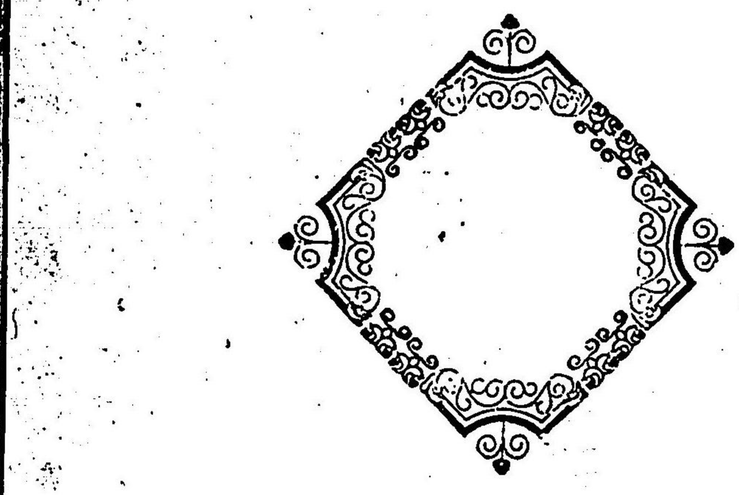
那翁航海日記 終

版權所有

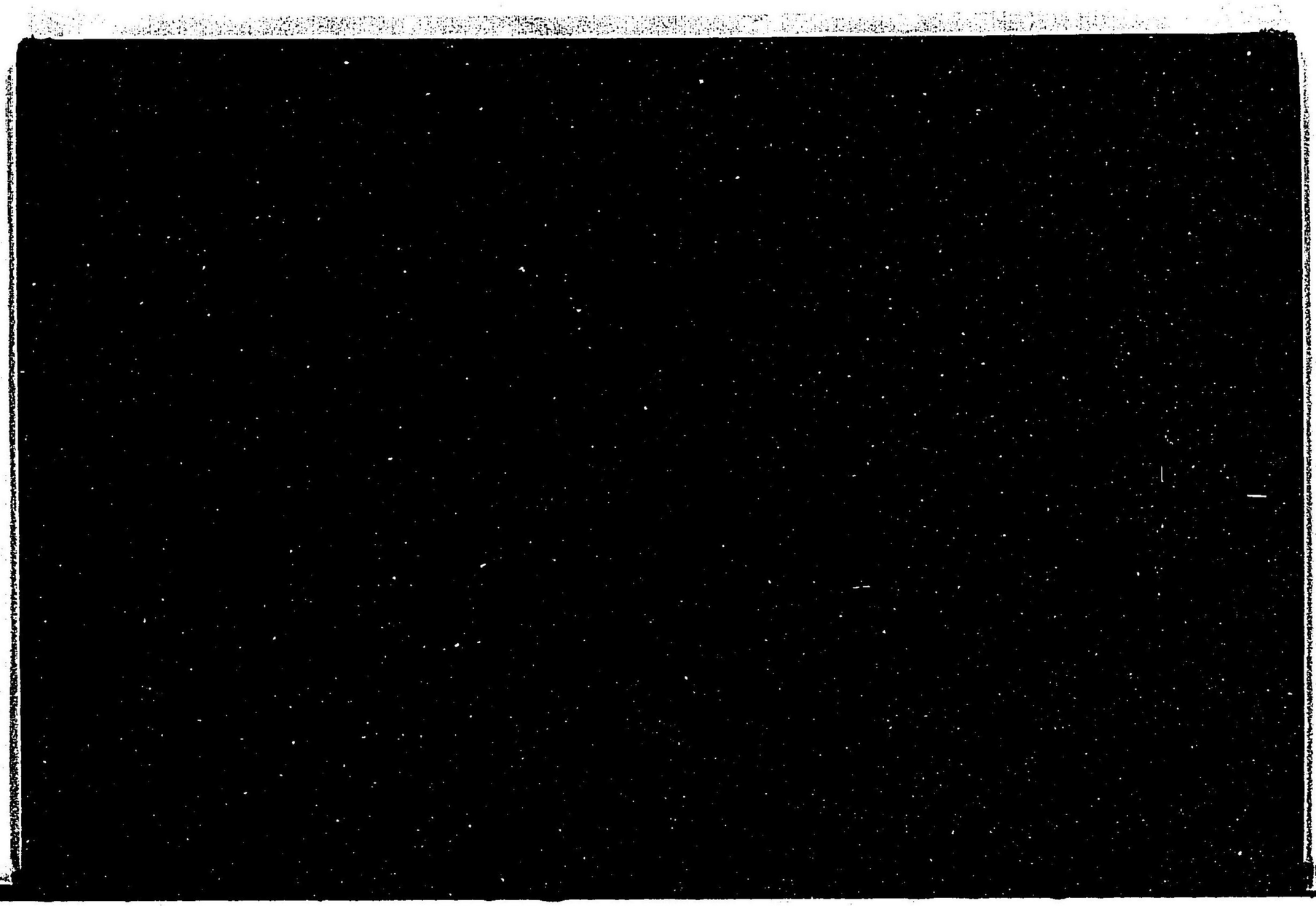
明治二十六年一月四日印刷
明治二十六年一月拾五日出版

賣捌所
大阪市心齋橋通北久寶寺町北入
濱本昇明堂

發行者 大阪市東區北久寶寺町四丁目卅五番屋敷 濱本伊三郎
著作者 大阪市東區今橋五丁目四十七番屋敷 高橋元吉
印刷者 大阪市東區和泉町二丁目八番屋敷 前野茂久治



42
169



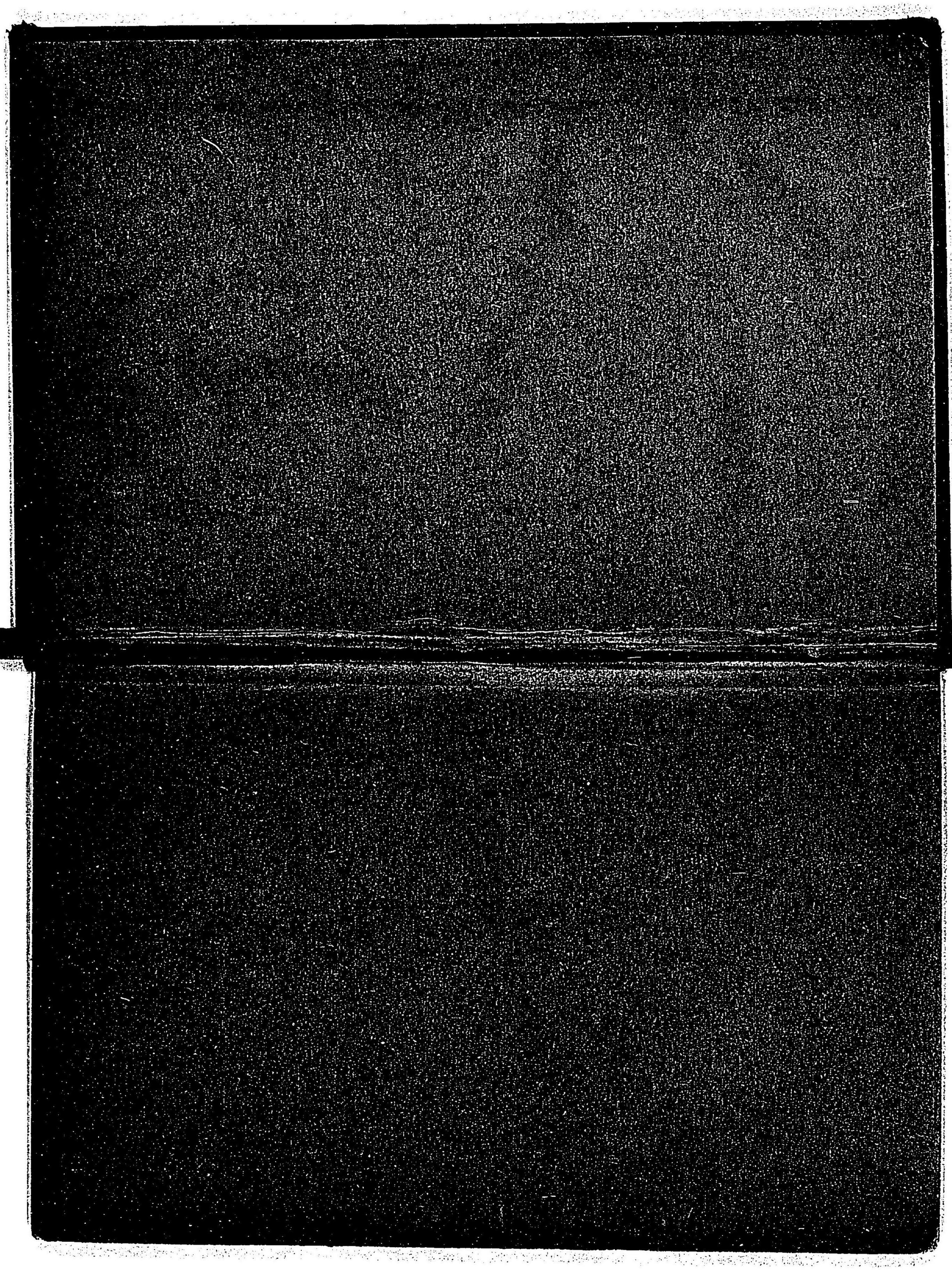
42
169

022200-000-2

42-169

那翁航海日記

ラスーズ/著

M26

ADA-0636